

生涯学習とは何か

—現代課題の認識のもとでの再定義の試み—
昭和音楽大学 西村美東士 (mito)

発表要旨

現代人の意識を表わすいくつかのトピックスに基づき、生涯学習支援の契機、体験的な問題意識から、つぎの3点にわたって生涯学習に関する新定義を提案する。①「発達だけでなく癒しも」＝発達・成長の欲望だけでなく、「癒されたい、安らぎたい」という人間の自然な欲望も、生涯学習の動機である。②「事実よりも真実を」＝生涯学習は、事実のインプットのためよりも、真実に少しでもふれてワクワクするためにこそ、行われる。③「積極的積極性とともに積極的消極性」＝生涯学習を、「誰からでも何からでも学びたい」という「積極的積極性」の行為と定義するとともに、それを持続するための、ほかの側面での深い撤退、すなわち、「積極的消極性」の意義をも明らかにしたい。

最近の関係記事 (拙論)

1つめは、「発達だけでなく癒しも」です。人間、日々発達しているのを実感するのうれしいことですが、実際には、それだけじゃなく、「癒されたい、安らぎたい」という欲望もあるのが自然だと思います。前者だけを声高に相手に押しつけるのって「ウソだな」と思うのです。

2つめは、「事実よりも真実を」です。学習というが、つまらない事実の集積に「圧迫されること」であるようなマイナスイメージが、小学校以来、ぼくたちにありまして、これがワンダーランドとしての生涯学習への接近を妨げている。ほんとうのところは、事実なんかはおもしろくない。ぼくたちは、事実のインプットのためではなく、真実に少しでもふれてワクワクするためにこそ、出会い、生きているのだ。事実は、その集積が真実に近づくときだけおもしろいのだ。このように思うのです。だって、ともこさんだって、ご自分の歌詞を「事実と違うわね」といわれても「当たり前でしょ」と思うだけでしょ。もし、「真実とは無縁な」などという失礼なやつがいたら、「どうしてよ」となりましょね。歌詞も、人間存在の真実に接近するすばらしい虚構のひとつなのだと思います。

3つめは、「積極的積極性とともに積極的消極性」です。「誰からでも何からでも学びたい」という積極的な生き方をするのを見てみると、じつは、撤退させるをえないような場面の多い世の中で、積極性発揮の一方で、他者のせいにすることなく、さわやかな撤退とどこかでしようとしている。ぼくはこのように自己決定・自己管理型の「深い撤退」を「積極的消極性」と呼んでいます。生涯学習や人間交流のような「積極的積極性」の行為は、この「積極的消極性」と連動関係にあると思うのです。この2つに対して、「積極的積極性」(やりたくないけど頑張っている)、「消極的消極性」(被害を受けているからできない)の2つが、ワンダーランド発見のネックになっていると思います(じつはぼく自身のことですが)。

(全日本社会教育連合会『社会教育』「くえすちん あんど あんざー」平成7年7月号より)

参考

①「発達だけでなく癒しも」

—受容と変容の生涯学習—

「自分を変えたい」という欲求は、じつは、2つに分類できるのでないか。

欲求の種類	欲求の動機
I 自己否定としての変身欲求	今の自分を肯定できないから、自分を変えたい。
II 自己受容による学習欲求	今の自分を肯定できるからこそ、自分を変えたいと思える

ぼくが今まで提唱し続けてきた「枠組み自体を変化させる生涯学習」というのは、当然、IIということになる。最近の臨床心理関係者の話(書籍、依存症など)を聞くと、「たとえ社会的に不適当」といわれる人であっても、その人はその行為を選ぶべくして選んでいる。その行為自体を「変えさせよう」と思うことは、無意味、または危険である」という考え方が強くなってきているようである。しかし、あるカウンセラーが、そういう認識のうえで、「ただし、自分を知ることと自分を大切にすることは重要である」と言っていた。神経性の胃潰瘍の患者が、「仕事をレベルダウンするわけにはいかないのだから、ほかのことではどうでもいいから、あなたにばかりの胃潰瘍だけ治してくれれば」と訴えてくるというのだ。ぼくの言葉で言い直せば、「客観視」と「自分のために生きる」ことの大切さということになるのか。Iだけの願望で「学習」し続けることにとどまるならば、同じ枠組みのまま処方箋的な知識が肥大化するだけで、「胃潰瘍にならない自分になる」という変身欲求は実現できない。これに対して、そこまで頑張ってきてしまった自分を本当に知ることができれば、「それはそれで無理もない状況だった」と今までの自分を受容することができる。そういうふうに変容ができて、初めて、胃潰瘍になるような生活自体を主体的に革新する勇気もわいてくる。つまり、自己受容こそが自己変容につながるのである。

「自己の枠組み自体が変化する生涯学習」というのは、「今の自分はだめだ、頑張らなくてはいけなし」ではなく、「今の自分のままでもまんざらでもない。でも、わくわくすること(ワンダーランドとしての生涯学習)に出会って変化する」としたら、ますますすばらしいということであり、その援助というは、「けしからん、変えなさい」ではなく、「こんなにしてきなごがあるよ」という提案型であるべきだということになる。

②「事実よりも真実を」追求する生涯学習

起草委員としてぼくも関わった練馬区生涯学習推進懇談会答申「土とみどりひとと自分に出会える練馬をめざして—練馬区における生涯学習のあり方とそこの推進について—の提言」(平成6年2月)においては、「人は生涯、学習すべし」という「べき論」を排除し、「どこまでも知りた」という自然発生的な欲求を生涯学習論の根源的な動機として重視しようとした。しかし、さら

には、その「どこまでも知りたい」という場合の学習対象とは何かということを考えておかねばならないだろう。これに関してほくが知りたいことは、「どこまでも知りたい」のは「事実」ではなく「真実」であるということである。事実の積み重ねに終わるのでは、駒田のいう「深い感動」(省路)もないであろう。社会教育の授業においても、学習者の頭なかでいわゆる「社会教育の知識」が肥大化するだけの結果に終わるのであれば、それは生涯学習社会が「倒し」ようとしている学歴偏重社会と同じ穴を掘っている蟹にすぎないのである。どちらも「学びたいから学ぶ」というワンダーランドとしての学習が疎外されているからである。

もちろん、枠組みは変えないままその枠組みに知識を詰め込むことにこそ「学習欲求」を感じるとする人もいるかもしれない。しかし、ほくには、そこに、「職場の誰がどこ出身で、どこどの派閥に属していて、どこから異動してきて、今度はどこに異動するか」をつねに嗅ぎまわっているためにそういう知識が豊富になった人を見ることさのような、やりきれない切なさを感じるのである。その人は学びたいことを自由に学べばよいと思うが、そんなタイプの学習にとまっているあいだは、社会が人や金を使ってそれを援助することもないであろう。

ほくは、ここで現代の実証的学問の存在意義を全否定しようとしているのではない。実証的積み重ねが事実に関する知識の肥大化(暗記)にとどまることなく、真実の追求のために有効に機能する場合だって多いのだ。ただし、その場合でも、「真実をどこまでも知りたいから事実を知ろうとする」という主目的な目的意識が求められる。

事実が小説よりも奇なり、という。一生懸命、採用試験の勉強をして、合格する実力(真実)を身につけたとしても、そういう人が落ちて、入るはずのない人がたまたま受かってしまうこと(事実)だってありうる。しかし、自分は、その瞬間に自分をほめてやるべきなのだろうか。それは、挑戦可能なチャンスを見つけてきて、一生懸命に採用試験の準備を重ね、試験当日は「もしかしたら落ちるかもしれない」という恐怖に打ち勝って試験場に行き、そして、最後の試験の最後のチャイムが鳴ったときなのではないか。けっして、試験終了後、不合格が過ぎたから、合格通知がきたときではなく、合格、不合格は「小説よりも奇なり」の事実すぎないからである。ここでも、ラッキー、アンラッキーという事実によって右往左往させられてしまう主観的な態度から、自分の人生のうち自己決定できる部分を自己決定して生きているのかという真実の部分を重視する客観的な態度に転換することが求められる。

下表において、真実とは「合格する実力」を意味し、事実とは「試験結果」を意味する。

真実	事実	受験主体としての判断のあり方
I	○	○ 悔はなかった(社会のもつ真実の範囲)
II	○	○ 自己の小さな真実の範囲と出た
III	×	×
IV	×	×

③「積極的積極性」の行為としての生涯学習

生涯学習においては自分の欲望や意思に基づく「自己決定」という要素が重要である。ここで「自己の欲望に基づく本来の自己決定」とは、すなわち、社会や人のせいにしていない、すなわち「自分のため」に、主体的にやっているとすることである。そこで、次の4タイプを整理して提示したのが今回のほくの議論である。

I	主体	外見・結果	特徴
I	積極的	積極性	自己決定(生涯学習)
II	消極的	積極性	仮面・戦術(受験勉強)
III	消極的	消極性	敗北主義(被害者意識)
IV	積極的	消極性	自己決定(無為・深い徹底)

たとえば、生涯学習活動や地域活動やボランティア活動をしている人のなかにも、その活動をしたい人に対して「けしからん」「へすべし」といういい方をする人がいる。そういう人は、いわば「過去と他人は変えられない」という厳然たる事実をイライラしているのである。深く悩まないであろう。じつはこの人たちは、本来の「自己決定」の生涯学習としてのIの状態にあるのではなく、「不幸の手紙」をもった人のようにIIの状態にあるのではない。もし、Iだったら、「この活動はとても魅力的だよ、素敵だよ」「いつでもおいでよ、歓迎するよ」と言うことはあっても、そういう活動をしていない人を見て責任を追及する欲求に駆られてイライラするなどという不幸には陥らないと思われているのである。(IIおよびIIIのどちらかたど存在意義について一略)

IVの根底的な状態というのは、これはもうすごいとしかいえない。広大な時空における自己の小ささを極度に受け止めて、ときの権力や価値観に感ぜられず自己に与えられた人生のひとときを静かに味わう。ほくはこそ深さにあこがれや尊敬さを感じるのだがどうだろうか。社会にとつては直接的利益にはつながらないかもしれないけれど、「立つ鳥、あとを濁さず」「深い撤退」などのさわやかさは、今後のネットワーク型社会の創造にとってはむしろ重要な要素のひとつというべきであろう。そういう「深い撤退」などのIVなら、ほくたちのような俗人にでもそれなりに実現できる状態であろう。

生涯学習は「学びたいことを学びたい手段で学ぶこと」であり、「自己管理型学習」であることから、本質的にはIの状態のものといえよう。Iの状態としての規定は、先に述べた生涯学習は「自発的な行為」という規定よりは明確であり、IIの状態での従来の「させられている学習」などとの違いをより明確に位置づけることのできる規定としても、なかなか有益であるとほく自身は考えている。

そして、IとIVは連動関係にあるのだろう。ある一人の人がIのような生涯学習をするためには、どこかでIVの「深い撤退」をしているはずだ。この4パターン分類が、Iのタイプの生き方(積極的積極)の人が「生涯学習的」であるなどという機械的なタイプ分けだけで終わるのなら、実質的には意味がないのであり、それよりも「深い撤退」が許されるネットワーク型社会における自己決定のあり方を考えるということこそ、この4パターン分類の意義があるのだろう。